



総評

水野：まず全体の総評として。乾さんはここにいる榊原と河野に票を入れているんですけど、ここについて詳しくお話しただけならなというふうに思います。

乾：まず河野さんのほうですが、テーマとして、郊外の衰退を取り上げたのが印象的でした。どの都市にも周縁部には郊外が広がっていて、その多くで空き家が社会的な問題になっています。いま、まさに、考えなくてはいけないテ

マだなというのが票をいれた理由のひとつです。それと、仕組みも含めて具体的な解決策が考えられているということがいいと思った。半分公共でしたか、、、最終的にどういう言い方していましたか。

河野：そうですね。小さな公共みたいなことを考えていて、、、

乾：誰が運営するかとか、はどういう設定でしたか。

河野：運営したり、その場所を使っていくのも

そこに住んでいる人というふうに考えて設計を進めました。

乾：自主運営ってということですかね。そういう意味でも、小さな公共ってという意味で言っていたのか、、、

河野：はいそうですね。

乾：地域の問題を当事者で解決していくことは財政の乏しい日本で社会的に求められていることですが、それに対してやり方が方法論的に提示されているのが良かったと思っています。方法論としても、建築単体として提案されているのではなくて都市の構造にあわせた提案になっているのが良かったです。河野さんは袋小路に着目したわけですが、横浜特有の、急斜面地に広がる郊外の住宅街には袋小路がたくさんあるという都市的な構造に気付いたわけです。その構造を生かしながら、その袋小路に関係している人がまずは集まるような場を作っていくことでしたが、これがあり得そうというか、都市の構造と建築のあり方がうまく組み合わせられていて面白い空間になっていますし、まちづくりの方法として可能性がありそうだなと思いました。あとはいいなぁと思ったのがタイトルです。多くの先生方の心を引いたと思うんですけど、実家という心の拠り所が自分の家と敷地だけに止まるのではなくて、住宅街全体の経験である感じているってことですよね。そういうことを考えるのは大切だなと思わせる力があって、タイトルとセットでいい作品だと私



は思いました。

「いつまでも、この街は私の実家」河野美紀
→ p60

水野：ありがとうございます。榊原の作品についてはどうでしょうか。

乾：卒業制作は、みんなすごい面白い敷地を選んでくださるんですけど、とりわけいい敷地だなあって思いました。切り通しっていう歴史的に作られてきたインフラですよね。鎌倉に相應しい場所ってどこかと考えた先に、建築じゃなくてインフラを作るのはどうかと思ったことがよかった。インフラに興味があってそれに相應しい敷地を何かこうを見つけてきたのかもしれないし、地域なのかインフラなのか、どちらが先だったのかわかりませんが、かなり衝撃を受けました。

榊原：講評会のプレゼンが終わった時に乾さんが、プログラムを入れないとしたら、ここここを繋いだらこういうことが起きるっていうことが直接形に落とし込めるって事をおっしゃられたんですけど、、、

乾：この計画は、インフラとしてだけでも街全体が変わってしまうポテンシャルをもっているじゃないですか。新しい道が引かれると人の動きが変わって、街に直に影響してしまうプロジェクトですよね。まずそのことがおもしろい。もちろん、建築にしなければいけないから、色々プログラムを入れたわけで、そのことに対して否定するつもりはないんだけど、入れなくても

築であるべきかっていうような折り合いは、乾さんが建築を考える上でどのようにしていますか。

乾：切り通しが今あまり理使われない理由として、そもそも物流の方法が変わったからですね。元々は、人がモノを運んでたから、細くても急斜面でもいいかわりに、なるべく最短で行きたいという欲求があって、それで切り通しができたのかと思います。それに対して今はトラックがメインですから、急な坂とか細い道は苦手なわけで、それで切り通しが物流のルートからはずれてしまったのかと思います。あと、ライフスタイルも変わり、分業が主流になってきたわけです。勤め人が圧倒的に多数を占めていて、モノを個人で運んで商売するような人は少なくなり、人の流れも、家から駅、そして駅からは都心に電車で行くというようなツリー状の動きがほとんどになり、地域間をネットワーク的につなぐようなルートは、あまり必要とされていないのです。そうであるにもかかわらず、榊原さんのような現代の若者がなぜ興味を持つのかを考えてみるとよいと思います。もちろんノスタルジックなあこがれもあるとは思いますが、それ以上に、そこに新しい生活が作れるのではないかとほのかに思っているのではないですか？。切り通しが現代においてどういう可能性を切り開きそうかいうことをちゃんと考えた方がいいと思います。一人一人が自立して生業をもつように、企業に依存しないで生きていくライフスタイルとかに関わるのではないのでしょうか。学び方ひとつとっても、今は学校に集まって学ぶわけですが、もっと違う学びが求められた時に、こういうものが生きてくるかもしれないとか。そういう未来に結びついてくる可能性もあるように思います。そういうことを積極的に言えるとうよいと思います。20年もすれば街

ー想いと現実の折り合いー

榊原：質問なのですが、建築を考えるとときに、切り通しはこんなに素敵だっというように思いたいなもの、現実的に街に対してどんな建





© 原田雄次

も暮らしも劇的に変わります。交通のあり方もこれから激変します。切り通しのようなものが見直される可能性はかなりありそうだなと思いました。

榊原：今とか未来にとって、どういうものが必要になるかなっていうことを、切り通しの形がどうであったかを一旦忘れて、自分で仮説を立てていくというように。

乾：ライフスタイルの仮説を立てるというのはあるかもしれないですね。すでに新しいモビリティもいっぱい生まれてきているから。そういうのを含めて考えてもいいのかなぁと思いますね。

「守り・つなぐ・山」 榊原真歩→p192

横国の卒制

－特徴的な講評会－

水野：次に横国全体の卒制の捉え方についてお聞きしたいと思っていて、横国生の卒制の進め方や作り方で良いところ悪いところ、思うところなどあれば伺いたいです。

乾：横国は、講評会の有り方が特徴的ですよ。意匠系も計画系も歴史も都市計画の先生も全員集まるじゃないですか。しかも非常勤の方も全員お呼びするじゃないですか。毎年、30人くらいいいらしいですよ。これは他大学では

ちょっと見ない光景です。こんなに大勢で一人一人の講評をしているっていうのは、特徴的だと思います。未だ、講評会がない大学もありますからね、いつのまにか点数がついているみたいな。

水野：人数もですが、意匠系以外の分野の人が来る事も特徴になっているのです。

乾：意匠以外の先生方が積極的に発言されるのはいいなと思っています。いろんな分野の先生方の意見を聞けるのは本当に素晴らしい。しかし、講評会が充実しすぎているので、外に意見を求めようとしなくなっているところはあるかもしれません。皆さん、例えばさんだいいデザインリーグとかにあまり出さないでしょう。学内で十分に意見や批評が聞けるから。出せというつもりはないけど、ちょっともったいないかもしれませんね。あと横国の卒業制作の傾向としては学外に出すことをあまり考えていないから模型が結果として大きくなっていく。移動する必要がないから。先生が多いから、すべての先生に見てもらおうという皆さんりのサービス精神で、模型が大きくなっていったという側面もありそうです。

－模型の大きさ－

水野：模型の大きさについて、以前に北山先生はYGSAの模型がどんどん大きくなっている事が良くないという話をしていました。

乾：何とも言えないですが、大きいからと言って内容が充実していないケースを見ると、その労力を他に使ったほうがいいのか、という気持ちにはなりますね。それなりにお金も時間も

かかるから、その模型をつくるエネルギーを設計に充てたほうがいいのかはと思ってしまいます。だけど、大きいからこそ迫力があったり、設計ができていなくても模型で雰囲気を出すとか個人の技としてわざと大きくしているという面もあるので、あながち否定もできないとも思っています。

－驚いた－

水野：（中間講評について）「はじめはびっくりした」「思考の途中で発表が来てしまう」とコメントしていたのはどういう意図だったのですか。

乾：どういう文脈でしたっけ。

河野：最後のエスキスの際に「なにかしら自分の頑張っている事を見つけれたら横国はもう大丈夫みたいなどころがあるから頑張って」といったコメントや、「やりたいことを突き詰めれば大丈夫といった話の中で乾さんが「最初は驚いた」とコメントしていました。

乾：設計図がまともに書けていないものに建築の学位を出してよろしいんでしょうかと言う気持ちがあります。トイレなどの水回りが収まっているのか、階段がちゃんと上から下まで通っているのかとか。2級建築士の試験勉強を始めてもいいぐらいの作図のスキルが欲しいところです。一般的にはもう少し図面を書かせると思います。それに対して横国はちょっと甘いから、設計として成立していない図面も講評会に出てきます。それでも、アイデアが良ければすごく盛り上がるわけです。そのギャップに私としては驚いたっていうか、もう少し教育的な次元で「設計しろ」と言わなくていいのかな、と思ったりすることがあります。その辺のギャップの話だったんじゃないですかね。

－提案のどこを見るか－

水野：今の話を聞いていて思い出したのは、設計課題のときに、乾さんの図面を読み取るス



ピードが早いなあっていうのを感じて。具体的なエピソードとしては、何人かの図面がちょっと平面と立面におかしいところがあったりして、それに気づくのがはやかったり。のぞきこむように模型を見たり、細かいところまで見られているなあという印象だったんですけど。卒業設計に限らず、提案のどういうところを重要視して見ているのかなと思いました。

乾：建築設計は複雑なもので、皆さんのような学生の作品だとしても相当の情報量を持っています。それを把握しないと、その作品の意味を理解していないことになってしまうから、できるだけ読み取ろうと努力します。また、いわゆる計画学的な次元での正解と不正解というのはあって、そこは教育上で無視してはいけなところだから、確認しようとは思います。もちろん、それだけを言ってもつまらなくて、従来の計画学的のクライテリア（判断基準）からするとちょっとおかしいかもしれないけれども、それが何か新しいライフスタイルとか、これからのニーズとか時代を反映しているのかどうかっていう判断基準なども確認しようと思います。他にも、景観的な問題もあるじゃないですか。その街にフィットしているのかななどというようなものを総合的に見ようと思ってみたいです。

課題と形の関係

水野：意匠なので、デザインを考えたときにその想いとかは理想はあっても、そういう抽象的なものとおっしゃられたような現実的な問題はというふうにお考えですか。

乾：やりたいこととそれに対する具体的な設計をどう合致させるかという、それなりに知識がないと合致させるのが難しいところがあります。やっぱり学問だから勉強が必要で、ある程度の知識量がないと解決できるものでもできません。で、その知識量をどうやって増やしていくかという、他人の作品をみるのが早いです。ただ、しっかりと見ないといけません。その作品にとって何が課題だったのか、何故こういうプランにしなくてはいけなかったのかっていう

ことを想像しながら見る必要があります。つまり、自分の中で課題から設計的な判断までを再現するしてみるわけです。私の時代だったらOMAの作品がそういうことをする格好の対象でした。課題と、回答としての形態やプランの関係が読みとりやすいし、新しい作品のたびに新しい課題と解決方法がでてくるので、OMAの作品を見るだけでも、相当なバリエーションが頭に入るんですね。こういう場合はこういう解決するんだみたいな。初期の妹島さんの作品もめっちゃくちゃ明解で、建築の勉強にはピッタリの対象でした。そういう風に頭を働かせながら作品を読み続けると、自分の頭の中で、課題と形の関係がネットワーク化されていきます。それが自分の作品づくりに生きていくようになるわけです。でも、3年ぐらいただと、まだまだネットワークが構築されていないから、自分が思った課題と選んだ形がどうもマッチせずに苦しむわけで、そちらのほうが普通だと思います。

－頭を働かせながら 作品をよみ続ける－

河野：今の話でさらに聞きたいなって思ったことがあって。課題とセットで建築をよむっていうふうにおっしゃったと思うんですけど。その建築をよむ時には、書物とかなんかこの設計者が書いている言葉を読むとかっていうのもあると思うし、訪れて空間を体験するってことがあると思うんですけど、本とか体験とかどういう手順とかどっちを重視するとかそういうのがもしあれば、教えていただきたいです。

乾：それはどっちでもいいかなって思います。その作者が書いている本があれば、それが理解するルートとして1番早いでしょう。でも、自作解題のテキストでも全部のパーツに対して丁寧に解説されてるわけではないので、行かないと何を解説してたのかがよくわからないことがほとんどです。雑誌を見ても結局これって何やってんだろうみたいな。おもしろそうなんだけど、何を解決してるんだろうっていう疑問が逆にわきあがるというか。それだったら見に行かなきゃいけないだろうと思います。あと、嘘でも課題と解決を勝手にでっち上げるということも大事です。この建築はこれが課題だったに違いないと思って記憶しちゃう。そうやって、人の作品を自分の糧にしていくんです。私は結構思い込みが激しいから、人の作品捕まえてこれは絶対これを解決してんだって思いこんでいるものがいっぱいあります。自分で勝手に納得して、なんとかさんすごいなとか言って評価をしたりしてるのです。手順はどうでも良いと思います。とにかく、気になった作品があったら、それが何をしていた何をやってることな



ZOOMを用いてインタビュー



のかっていうのを自分なりに、妄想でもいいので組み立てることが重要な気がします。
河野：課題を推測しながらということですよね。今度から意識してみようと思います。

乾：はい、面白いから、どんどん妄想してください。

水野：それがその建築を作った人のコンセプトじゃなかったとしても、自分がなにか違う設計をするときに使えたりってこともあるのかなと。

乾：そうそう、そういうことです。周りの友人みても、結構やってます。ときどき私の作品の話になったときに「あれあーでしょ」などその人なりに妄想したことを言われる時がありますが、全然違ったりして、「ちょっと違うんだけど」みたいなことを思うこともあります（笑）。

水野：現代文の問題みたいですよな。「作者の意図を～」みたいな。

乾：ああ確かに。若干それはあるかもしれない。

水野：でもそれが重要な学びになる、、、。

乾：そうだね、確実に学びになりますね。

設計手法

ー合理的、客観的な判断ー

水野：最後に乾さんの設計手法というか、普段から現実に建物を設計して建っていくという中で、どういうプロセスで設計されているのかなと言うことが気になるところで。

乾：なるほど。うーん難しいですね。実務では人から設計をお願いされて、それに対して作業をしているわけです。そのお願いの中には敷地もプログラムも含まれていて、お施主さんが建築家に相談する時にはすでに、こういう場所にこういうものをつくと面白いんじゃないかっていうアイデアができています。つまり、皆さんが卒制で悩む8割方くらい悩みが既に解決している状況からスタートするわけです。だから皆さんが苦しめることと、私のような実際に仕事としてやってる人間が抱えることってちょっと違う次元にあると思います。とは言っても、この現代において大切にしなければいけないことを考えることを放棄するというわけではありません。施主さんの設定が正しく

ないかもしれないからです。お施主さんがもってくるプログラムや敷地が本当に魅力的なのかとか、正しい組立てになっているのかなとかは考えなくてはいけないと思います。
水野：その、お施主さんの考え方とか、その現代の問題とかでちょっと違うなってことを思ったときに、そこに主観的なというか、自分の思いみたいなものを織り交ぜていくっていう感じですかね。

乾：主観という感じじゃないかもしれません。できるだけ客観的に判断すると言うか、未来予測を立てると言うか、「多分、将来の社会はこうなるでしょうから、こういう準備をしないとまずいんじゃないですか？」というようなアドバイスになります。自分の思いというより、お施主さんのことを客観的に考えると、こうした方がいいということがあって、それをすすめるという感じです。都市計画的なセンスとか、社会学的なセンスとかがいるようなところはあります。いろんな意味で世の中の動きを追っていないと言えないことは多いかもしれません。それこそ主観になっちゃうから。だからなるべく、客観的にこうじゃないですかって言うようには気をつけています。

ー才能を伸ばすー

河野：その設計手法で気になると言うか、特に聞きたいのは敷地とか作るものとか小さな物事からっていう風に思うんですけど、どうやって1番最初の小さな出来事から建築の問題にする過程みたいなものは、どういう考え方でやってこられたのかなということをお聞きしたいなと思います。

乾：なるほど。小さな物事。例えばどの作品とあってありますか。その時に想像している、、、。

河野：私の中ですごく印象的だったのは、本当に最初の、幼稚園の改修からどんどん建築の形になって行くのが印象的でした。

乾：「片岡台幼稚園の改装」ですね。細かい気付きからスタートしたいという気持ちはずっと前からあります。細かい気づきっていうのは、例えばその、お施主さんが個人や集団として面白い振る舞いをしているとか、そういうところから気づくことがあります。例えば、幼稚園とかの福祉法人だと、たくさんの職員の方が作る雰囲気とかがあるじゃないですか。それが、たいてい面白いんです。まあ、建築設計を建築家に頼もうなんて思う人は大体ユニークだということはあるかもしれません。施主、敷地、プログラムなどすべての要素が面白いということは

なかなかありませんが、なにかしらの部分に面白いことを見つけてその才能を伸ばしていけたらと思うんですよ。才能という言い方が正しいかわかりませんが。いずれにせよ、そういうことをどうしたらいいのかなって考えていく中で、なんとなくアイディアが固まっていってというのはありますよね。

河野：その才能が強いと感じたところが建築とは全く関係がないかもって思っちゃったとしても、、、

乾：直接関係が無い時も確かにあるかもしれません（笑）。職員みんながなんか仲いいとかでしようかね。でも、その場合でも、では彼らが一緒にその過ごしている時間を大切にしないといけないとかに結びついていきます。建築は人の活動を長時間サポートするものだからできることが多い。いろんなものを受け入れられるようなところはあります。

リサーチ

ー2種類のリサーチー

勅使河原：その設計手法に何か近い部分なんですけど、乾さんのリサーチを見ていると小さな人が集まるような場所をしっかりと見た上でリサーチしているじゃないですか。それで作品を観た時に必ず物として現れている感じがしなくなって思うんですけど、形っていうのはどういう扱いになっているのかなっていう。どういう心持ちでリサーチしているのかなって。今回、自分も同じようなことをやろうとしてうまくまとめられなかったというフシがあるので気に

なっていて、せっかくなので聞いてみようかなと思いました。

乾：リサーチは大きく2パターンに分けられるかなと思います。デザイン・ボキャブラリーを集めるタイプのリサーチというのがまずあると思います。それは建築のプランニングやディテールに直接に反映させることが目的のものだと思います。パターン・ランゲージなど、形に直結する、設計に取り入れるタイプのものです。それはそれであり得る方法論だと思ってますが、「小さな風景からの学び」はそうしたものを目指しているわけではなかったです。「小さな風景」はもう少し根源的な問題を見たいというか、そもそも論を確認したかったところがあります。そもそも論というのは、そもそも人が集まることとは何なのか、とか、どういう場所に集まってしまうのかというようなことで、そういう根源的なことを知りたかったんですよ。あのリサーチを行おうとしたのは東日本大震災の直後で、被災地を色々と見てまわる中で結構、根源的な人の集まりをもう一度確認しておきたいということから始まったリサーチなので、、、。

ー好奇心ー

勅使河原：とすると、好奇心みたいなところなんでしょうかね。

乾：そうですね。本当に好奇心といえるかもしれませんが、簡単に言ってしまうと。何があれば人が集まってしまうのか。木が1本あれば集まるのか、気持ち良い影があるとやっぱり集まってるなーとか、そういう事例を集めていました。

勅使河原：1つ1つはシンプルだったじゃないですかね。

いですか。小さな段差とか、陽だまりとか、温度とか。それをこう今回うまくできないかなと思ってたので。すごくシンプルな、根源的な、、、

乾：ただ「小さな風景からの学び」のような間接的なリサーチを卒制で取り入れることは難しいと思います。もっと直接的なリサーチと設計との関係を作らないと、理解しにくいというか、やっぱり批判されちゃうので。卒制の場合はやっぱりパターンランゲージ的にパターン化できる対象を見つけてきて、設計に生かすというのが王道だと思います。

勅使河原。ありがとうございます。次につながりそうです。

水野。ありがとうございました。そろそろ時間ですので、、、。

乾：わかりました。

水野：卒業設計のことから乾先生の設計の話まで色々深くお話できたのでとても有意義な時間になったかなと思います。

乾：こちらこそありがとうございました。では失礼します。

聞き手：河野美紀、榎原真歩、勅使河原大誠、水野開
2021/03/13(Sat)

『小さな風景からの学び』

東京藝術大学乾久美子研究室との共編著

TOTO 出版、2014



乾 久美子

建築家。1969年大阪府生まれ。東京藝術大学美術学部建築科卒業、イエール大学大学院建築学部修了、青木淳建築計画事務所勤務を経て、2000年に乾久美子建築設計事務所を設立。2011～2016年、東京藝術大学美術学部建築科准教授。2016年より横浜国立大学大学院Y-GSA教授。著書に『乾久美子 そっと建築をおいてみると』（LIXIL出版、2008）、『小さな風景からの学び』（東京藝術大学乾久美子研究室との共編著、TOTO出版、2014）など。代表作に、延岡駅周辺プロジェクト、日比谷花壇 日比谷公園店など。



© 原田雄次